（１） 今年度の研究の成果と課題

Ⅰ　研究全体について

1．研究主題・サブテーマは適切であったか？

○適切だった。（昨年からのつながりもあったので）

2．研究内容・研究方法・研究組織・研究計画は適切であったか？

○適切だった。

○英語活動にしぼってあったので，進めやすかったと思う。

△英語力向上のための実践研修を時間を設けて行えばよかった。忙しい中でもあるので，夏季休業中などに。

3．校内研究会の持ち方は適切であったか？

○適切だった。

○短時間で終えることができた。

△良いが，研究主任以外の提案があっても良かった。

昨年度までの研究を継続し，外国語・英語活動にしぼった研究で，取り組みやすかった。しかし，当初計画した「英語力向上に関わる研修」「コミュニケーション能力に関わる研究」が進められなかった。

Ⅱ　授業研究について

1．授業研の組織や回数は適切であったか？

（本年度は，自主公開３本を低・中・高各ブロックで行いました。）

○年間３回の授業研究は，無理なく行える範囲でありよかった。

○多忙の中，自主公開できたことはすばらしかった。

○低・中・高で取り組んでよかったと思います。

○△回数は３回でよいと思います。１学期１回，２学期２回程度，低中高のつながりがわかるように似たような題材でやってもよいかも。

2．研究主題の達成度について

（授業中の子どもたちの姿，あるいは振り返りカードの記入内容などから）

○方法，内容を工夫することにより，テーマにせまることができたと思います。

○子どもたちは，楽しかったとの声が多かった。

○△『生き生きと活動する』という部分についてはよく達成できていたと思う。しかし，『自ら考えよく学ぶ』という部分についてはどうだっただろうかと思える。

○△振り返りカードの活用，評価に目が少し向けられれば良かったが，子どもたちは活発な活動をしていたので，本校のすばらしさを感じる。

○△授業の全体像や流れ，クラスルームイングリッシュなど，子どもたちにだいぶ浸

透しているので，子どもたちも主体的に学習しやすいと思われる。アンケートから，英語＝楽しいという感想が多かったので，生き生きと活動できたと思われる。ただ，よくわからない＝楽しくないという感想をもつ児童もいるので，フォローの仕方や授業内容の改善など検討する必要があると思う。

△子どもたちは，どうしても内容よりもゲームなどの形式に関心がいきやすく，内容に親しんだり，コミュニケーション能力の向上には成果が薄かったように感じる。

３．この研究や日々の実践を通して，英語活動についての理解が深まったり，授業に対し，見通しが持てるようになったりしただろうか？

（「学級担任主導の授業」「ＡＬＴとの役割分担」「コミュニケーション活動を仕組む」「Classroom English の活用」といった共通理解事項も含めて。）

〇この研究を通して，英語活動を行う際の見通しが持てるようになった。

〇本校の子どもたちは，あまり抵抗なく外国の人にも接することができると思う。

〇年間計画や授業案，教材などがあるので，流れの見通しは立てられた。

〇ＡＬＴとのＴＴは，ＡＬＴの個性と対応して考えていかなくてはならないが，基本的には担任主導で考えていけばよいと思う。

（ガストンが初めて来校したときのこと，廊下でＡＬＴに出会ったときのことなど）

〇△学担主導の授業やＡＬＴの活用については，議論でき良かった。クラスルームイングリッシュの定着については，もう少し工夫があっても良かった。

△「ＡＬＴとの役割分担」については，こちら側だけの問題ではなく，相手もあることなので難しさを感じた。

△コミュニケーション活動は，低中高の度合いを確認し、仕組んでいきたい。

△高学年は，今まで西小で取り組んできた内容から，英語ノートを中心とした内容にシフトしてきた過渡期（移行期）であったので，今後もさらに英語ノートの内容を効果的に利用し，コミュニケーション活動していく研究が必要だと思った。

授業研については，３回の自主公開という形をとって行うことができよかった。

授業中の子どもたちの様子からは，外国語を話したり，外国人と接したりすることにあまり抵抗がなく，生き生きと活発に活動する姿が見られた。これまでの研究の積み重ねの成果はもちろん，先生方が活動の内容や方法をさらに工夫していることが子どもたちのこのような姿につながっていると思う。ただ，よくわからず『楽しくない』という子どもたちもいるので，支援の仕方を考えていくことも重要である。

また，子どもたちが自ら考える場面や内容に親しみながら進んでコミュニケーションをとる場面をもっと設定できるようにしていかなければならない。特に，高学年に関しては，英語ノートを活用した実践を始めたばかりなので，コミュニケーション活動が活発になる効果的な活用方法をさがしていく必要がある。また，評価に関わる研究も行い，実践の成果と課題をもっと明らかにするべきであろう。

授業の進め方については，本校の特色である「学担主導」の授業が定着している。

もととなる指導案があるので，子どもたちの様子を見ながら，臨機応変に授業の内容や流れを変えることができ，子どもたちの活発な活動へとつながっている。ただし，ＡＬＴとの役割分担や打ち合わせについては，ＡＬＴとの兼ね合いで難しい問題がある。ＡＬＴの個性や授業に不慣れなＡＬＴのことも考えながら，こちら側から積極的に必要なことを要求していく必要がある。

Ⅲ　本年度の成果と課題について

1．成果

○研究授業を通し，本校の英語活動についての共通理解が深められた。
○英語活動に進んで取り組む子どもの姿が見られた。
○いろいろな言葉を英語で言うことができる子どもが多くなった。
○教材のストックがあったり，実践を見合っていたので，指導しやすかった。
○会議室にある教材は心強い。
○外国語に対する抵抗感がなく，体験を通しての本校の実践が実を結んでいることを実感する。
○３，４年生の英語活動の枠が決まったのでよかった。来年度実際に行ってみて様子をみていきたい。
○英語ノートを本校としてどう活用していくのかの方向性が見えた。
○英語ノートを利用した授業の展開をいくつか実践し，見通しがついてきた。
○電子黒板を用いて多少の実践が行えた。
○イングリッシュルームの活用（電子黒板）がわずかな時間ではあったが導入できた。
○自主公開授業は，普段気がつかないポイントを学ぶために有効だった。

研究授業を通して，実践を重ねたり，互いに授業を見合ったりすることで，全職員が共通理解のもと外国語・英語活動を進めることができた。また，たくさんの人の視点から見合うことで，ひとりでは気付かないこともわかり，お互いの実践に役立てることができた。さらに，子どもたちも様々な活動を通して英語に親しみ，英語を発することができた。

今年度の課題であった「英語ノートの活用」と「電子黒板の活用」については，授業の実践や計画の見直しを通して，若干見通しが持ててきた。また，１～４年生の指導計画と５，６年生の指導計画も全職員で見直しをすることができた。来年度以降，さらに実践を重ねる中で，よりよい活用方法等を探っていく必要がある。

2．課題

・電子黒板の種類によって使い勝手のよさと悪さを実感してしまった。現在ある電子黒板は使い勝手がよいとはいえないが，そこをどう工夫して活用していくか。
・ＡＬＴとどう授業を組み立てるかが難しかった。
・ＡＬＴと学級担任との意思の疎通をとることの大切さと難しさがある。ゆえに，ＡＬＴ

はなるべく頻繁に交代しないでもらえるような，現場での実情を委員会等にもまた改めてお話しして，できれば難しいかもしれないが数年間の契約でお願いしたい。
・英語ノートをさらに効果的に活用できるように工夫していくことが，子どもたちのコミュニケーション能力の育成につながるのではないか。
・せっかく１年生からの英語－外国語活動なので，１～６年のつながりを意識して，積み上げたものを明確にして，事前アンケートなどもとりながら内容を考えていきたい。
・外国語活動の今後の見通し，小中連携等，今後も気をぬかない情報収集が必要だと思う。
・電子黒板の活用。
・電子黒板がきたので，活用方法の洗い出し。
・教材が重なってあるので，他学年のものも使いたいがよくわからないことがある。授業ごとにやったものをまとめておけたらよいか。
・英語活動には興味をもって楽しそうに取り組んでいたが，他の学習活動に対しても“自ら学ぶ子ども”の育成に向けて取り組む必要があると思います。
・言われたこと，聞かれたことにきちんと反応する・表現する力を育てていきたい。

外国語・英語活動に関わっては，電子黒板や英語ノート，ＡＬＴ，他の小学校や中学校との連携，外国語活動の今後の見通しなど，校外と関わる部分についてより積極的に情報収集を行い，これまで積み重ねてきた本校の実践をより生かしていけるようにしていかなければならない。

また，外国語・英語活動はもちろん，それ以外の学習活動に関わっても，生き生きと活動するだけでなく，“自ら考え学ぶ子ども”の育成を目指して研究をしていく必要がある。

◊児童実態調査より◊

※実態調査の結果は集計表を参照。

【考察１】　　今年度　　（昨年度）

「外国語・英語活動が好き・どちらかというと好き」＝９２．８％（９１．４％）

「外国語・英語活動が嫌い・どちらかというと嫌い」＝　７．２％（　８．６％）

外国語・英語活動を楽しみにしている子どもたちの割合は昨年度よりも若干上がっている。継続して研究している成果とより工夫された実践を行っている証拠であろう。好きな理由として一番多いのは『楽しく活動できるから』である。特に『ゲームが楽しい』という答えが最も多いことは昨年度と変わらない。また，『英語を話せた・話せるとうれしい』『新しい言葉を覚えるのが楽しい』という答えや『丁寧にわかりやすく教えてくれる』『塾よりおもしろい』というような答えもあった。今年度の研究で「英語ノート」や「電子黒板」を活動の中に取り入れたり，職員の外国語・英語活動への理解が深まったりした結果ともいえる。

しかし一方で，『発音が難しい』『何を言っているかわからない』『ゲームのとき忘れてしまう』といった理由で嫌いと思っている子どもたちもまだいる。割合は少ないので，授業中の観察をよく行い，個別の手立てを考え支援してあげる必要がある。

【考察２】

「楽しい（好きな）外国語・英語活動」「心に残っている活動」もやはり『ゲーム』が多数を占める。そんななか，『インターナショナルデー』『他国の人の話を聞くこと』が心に残っているという回答もあった。ＡＬＴだけでなく，いろいろな国や文化を知っている人との交流を通して，子どもたちが国際理解を進めていることがわかった。

【考察３】

「日常生活の中で外国語（英語）を使うことがある」＝３９．４％（４３．１％）

昨年度に比べると割合が若干下がった。使う場面については昨年度とほぼ同様で，『挨拶やお礼』『スポーツや食事をするとき』『外国人と会ったとき』という答えであった。

【考察４】

「外国語・英語の活動をしてよかった（役に立った）」＝４３．２％（５２．９％）

昨年度よりも割合が下がった。答えの内容は昨年度とあまりかわらない。低学年では『英語で自分の名前が言えた』『動物や色など新しい英語を覚えられた』と英語を獲得

できたことが喜びにつながっている。一方，高学年では『外国人と会話ができた』『外国に行ったとき』など，学校での活動が日常生活の中で実際に使えることに喜びを感じているようである。

考察３とも関連して言えるが，これまで通り「日常生活に根ざした題材」を扱いながら，“実際に外国人と話す機会”をより多く設けることが必要不可欠である。ＡＬＴだけでなく地域在住の外国の方などにも授業に参加してもらえるように活動を改善していくことも考えていかなければならない。そうすることで，子どもたちが「外国語・英語活動をしていてよかった」と思えることにつながると考える。

【考察５】

「外国語の活動が今後（将来）役に立つと思う」＝５９．１％（５７．８％）

昨年度より割合が若干上がった。その答えの中には『外国の友達を作りたい』『学校の先生になって子どもに教える』といったこれまでは見られなかったものもあった。同じ年代の子ども同士で，あるいは自分が将来大人になったときに子どもたちと，外国語（英語）を媒介としてコミュニケーションをとりたいという気持ちの表れだろうか。本校で力を入れてきた“コミュニケーションを通した活動”のよさが子どもたちに伝わっているのかもしれない。

【考察６】

「外国語・英語の活動でしてみたいことやもっと知りたいこと」は，『ゲーム』という答えが最も多かった。また，『英語の文字を知りたい』『英語が書いているプリントをしたい』『英文が読めるようになりたい』といった文字に関わる活動を望む子ども，『外国の料理を作って食べたい』といった体験的な活動を望む子どももいた。

「外国語活動をしての感想」には，『道案内が役立ちそう』『中学に向けて頑張った』『もっと時間を増やしてほしかった』という感想があった。

以上のことから，子どもたちの外国語・英語活動への意識が前向きで、非常に高いことがわかった。

（２） 来年度の研究の方向性について

これまで研究してきた外国語・英語活動は，今後も大切にしていく。

今後は，英語活動にも関わってきた“コミュニケーション”の力（思考力・判断力・表現力など）に関わることを中心に，本校の子どもたちに欠けている力，または子どもたちに身につけさせたい力を改めて検証し，外国語・英語活動に限らず，広い視野で研究を進めることが確認された。